

口の激増は乾隆末には三億に迫ったが、一方耕地の擴張は限界に達し、更に國外移住の禁止や、官僚・地主・商業資本の土地集中、貨幣經濟の浸透等による内的諸矛盾は、滿洲・蒙古と並んで臺灣へも多數の人口移動をもたらし、「新開地」の形成を促した。

臺灣開發の發展は、清朝の移民・開拓政策によって規定を受けざるを得なかったが、それにも拘らず、抑制的消極的な康熙・雍正期において、未開拓の中・北部へと全島的な開發の據點と端緒がすでに開かれている。開發過程は先ず土地開墾であるが、その生産力化には水利開發（埤・圳の設定）が不可欠であり、兩者は相互规定的に進められた。

當初の土地所有における墾戸・佃戸關係と並んで、水利開發においては開發者たる埤・圳主と引水者との間に、水租納入を前提とする用水保障の契約關係が成立していた。埤・圳主の水利權は、土地業主權とは別個の獨立した私的・物權的權利であった。しかし、かかる當初の水利關係は、その後の歴史的諸條件ともなう土地所有關係の變化（一田兩主制の成立）と共に、著しい變化を見るに至っている。ここでは水利組織の形態的變化を、その管理者たる埤・圳長の性格を通じて考察しようと思う。

この考察によって、他の「新開地」にも見られる若干の共通した特殊性の反面、中國における社會集團とその近代化過程の解明に、試験管的な手がかりが得られるのではなからうか。同時に又、清代臺灣の社會經濟的把握は、それによって規定されざるを得なかった、日本の臺灣植民地支配政策の志向と特徴をも明らかにする一素材となるであらう。

金の景祖について

三田村泰助

金の景祖は金朝六代目の君主とされ、その事跡は金史世紀にみえる。いま池内宏博士の金史世紀の研究によると、景祖に關する世紀の記述はすべて史實とはみなし難く、ただ景祖その人のみは實在したと斷じている。

しかし博士の景祖紀についての史料批判には疑問がある。例えば景祖が平定した世紀所載の五國蒲轟部について、遼史の該當記事に蒲奴里部とあることから、五國部に蒲轟部は存在しなかつたとく。だが蒲奴里部はまた噴訥・盆奴里とも寫され、問題の蒲轟も同音異譯とみなしてよく、この理由のみからこの記事を否認しえないと思う。そしてその内容からは、景祖と五國部との關係をしりうるのである。つぎに世紀は景祖の支配下にある部衆名に、白山・耶悔・統門・耶懶・土骨論および五國部長をあげている。これに對し、博士はその事實なしとされた。おそらく當時阿勒楚喀にいた金室完顔氏が、このような東南遠隔の地域を支配したとは考えられなかつたからであらう。だが金室の阿城移住の時期に定説がなく、景祖のときは、金室はなお阿城に移らず、その東方にいたと解すれば、世紀の上述の記事は強ち否定されるべきではなからう。

それでは景祖のとき、金室はどこに居たかといえ、その解明は景祖のもつ官職名から推定されよう。景祖の名は世紀に烏古迺とあ

り、別に慈烏を意味する女眞語の活羅がある。なお松漠紀聞に胡來、高麗史に活羅太師とみえる。思うに高麗史のそれは官職名とみるべく、そのことを示唆するものとして、龍飛御天歌所載の火兒阿豆漫の語をあげうる。火兒阿は地名で、現在の三姓に當り、豆漫は元制萬戸の首寫である。一見して火兒阿は活羅に比定され、その地

は金代の五國頭城であつた。また太師は遼制をうけたものだが、それに當る金の官名は池内博士の推定する忽魯勃極烈となしてよい。忽魯の語は高句麗の溝瀆、渤海の忽に由來する城の義であろう。結局景祖は五國頭城において、勢威をはつたと思う。